

文化財学習会

ふ る さ と 探 訪

新指定国史跡
高松松平家墓所（靈芝寺）周辺を訪ねる

日 時 令和元年12月8日（日）



共 催

高松市歴史民俗協会
高松市文化財保護協会
高松市教育委員会

目次

1	高松松平家	・	・	・	1
2	靈芝寺	・	・	・	5
3	願興寺	・	・	・	7

1 高松松平家

高松松平家は、徳川家康の末子三人により成立した徳川御三家の一つ、水戸徳川家から分家して創設された大名家です。初代松平頼重は、寛永十六年（一六三九）に常陸下館五万石、さらに生駒家の転封のあと寛永十九年（一六四二）には讃岐高松十二万石が与えられました。高松松平家は、明治維新まで十一代にわたって高松城を居城とし、二百二十年余りにわたって東讃を治めてきました。初代頼重による治水事業をはじめ、歴代藩主による砂糖製造や塩田開発などの殖産事業によって高松藩は大いに栄えました。

松平頼重は、水戸徳川家初代頼房と侍女谷氏（久昌院）の間に生まれ、弟は「水戸黄門」

みつくこ

よしのぶ

で知られる水戸家二代の光圀です。このとき、兄の尾張義直、紀伊頼宣にまだ男子の出征がなかったため二人の誕生は秘密にされ、頼重は京都に預けられ、のちに弟の光圀が世継ぎと定められました。本来、兄である頼重が水戸家を継ぐべきだったと考えた光圀は、頼

よりしげ

ひたちしもだて

重の子綱篠に水戸家を継がせ、光圀の子頼常に高松松平家を継がせています。以後、幕末まで水戸家と養子縁組が続いた高松松平家は、將軍家に近い存在であり、徳川御三家の分家で唯一、「丸に三つ葵」の御紋の使用が許されました。なお、頼重の子孫が代々水戸家を継いだことから、幕末に水戸家から一橋家に養子に出て、さらに十五代將軍となった徳川慶喜は頼重の血筋ということになります。

よしのぶ

頼重は浄土宗に帰依し、高松城を築いた生駒親正が宇多津から高松の寺町（現在の番町一丁目）へ移した超世山養通院浄願寺を菩提寺と決めました。なお浄願寺はその後、寺町より南の地へ再建されました。さらに、法然上人を敬慕する頼重は、讃岐に流された上人ゆかりの小松庄生福寺（まんのう町）の遺跡を城下約八〜九キロメートル南の地へ復興し、仏生山来迎院法然寺と号し、浄願寺に加え、法然寺を墓所としました。頼重は、「仏生山法然寺条目」三十八か条を定めました。このうち「般若台の外は道俗貴賤を撰ばず、墓処所望之を建てさせる可し」の条目により、藩主家の墓所である般若台以下であれば、身分にかかわらず希望する者は同じ仏生山の山中に墓を建てることができました。

えり

高松松平家は代々浄土宗に帰依していましたが、水戸徳川家から高松松平家を継いだ二

よりつね

よりひろ

代頼常及び九代頼恕は実家の風習に倣い、れいしじ霊芝寺に儒式で埋葬されました。さらに、十代

よりたね

いえなり

目頼胤は、正室が將軍（徳川家斉）の娘であったため、正室の墓所である伝通院（徳川家

おだい

康の生母於大の墓所）に葬られています。この他、藩主の正室でも実家に倣い他の場所に葬られた人もいます。

平成二十三〜二十六年に香川県立ミュージアムにより、法然寺の墓所及び主要伽藍の立ち並ぶ境内地部分と、霊芝寺の墓所の調査が行われました。藩主や一族の墓がまとまっております、江戸時代の大名がどのように葬られたかを知るうえで貴重とされ、平成三十一年（二〇一九）二月二十六日に高松藩主松平家墓所として国の史跡に指定されました。

代	藩主	藩主期間	墓所
1	松平頼重（よりしげ）	1642～1673	法然寺 （仏生山町）
2	松平頼常（よりつね）	1673～1704	靈芝寺 （さぬき市）
3	松平頼豊（よりとよ）	1704～1735	法然寺 （仏生山町）
4	松平頼桓（よりたけ）	1735～1739	法然寺 （仏生山町）
5	松平頼恭（よりたか）	1739～1771	法然寺 （仏生山町）
6	松平頼眞（よりざね）	1771～1780	法然寺 （仏生山町）
7	松平頼起（よりおき）	1780～1792	法然寺 （仏生山町）
8	松平頼儀（よりのり）	1792～1821	法然寺 （仏生山町）
9	松平頼恕（よりひろ）	1821～1842	靈芝寺 （さぬき市）
10	松平頼胤（よりたね）	1842～1861	伝通院 （東京都）
11	松平頼聰（よりとし）	1861～1869	法然寺 （仏生山町）

2 靈芝寺

靈芝寺は、日内山遍照院靈芝寺と称し、十一面観音菩薩を本尊とする真言宗の寺院です。江戸時代は東林山遍照光院あるいは日内山と称し、律宗寺院で釈迦如来を本尊としました。靈芝寺境内の西に高松藩主二代頼常、九代頼恕の墓所があります。

靈芝寺は、さぬき市末六九五に位置し、創建は史料により異なりますが、平安時代にはすでにこの地に寺院があったことは確実であるといわれています。天正年間（一五七三〜九二）に至り、戦国時代の戦火により衰退しましたが、その後、寛文二年（一六六二）に頼重が帰依した神護寺別院平等心王院の僧である恵忍を京都から招き再興したとされています。

日内山へも、仏生山と同様に歴代藩主の参詣が行われていました。



参詣は墓所入口の門から石畳の参道手前まで駕籠かごで入り、そこから墓所へ徒歩で入りました。墓所は、墓標と墳墓に向かって階段状に高くなっており、三段の空間が設けられています。中段部分に拝殿があり、そこで拝礼・配膳が行われました。『讃岐国名勝図会』には、「当国君御代々尊牌」が安置されていることが確認でき（現在は本堂にある）、藩主墓を奉守する寺として歴代の菩提を弔ってきたものと考えられます。

歴代藩主の墓所参詣の後、霊芝寺へ立ち寄った際の居所として別棟に「お成りの間」が現存しており、九代頼恕が「邀月楼（ようげつろう）」と名付けたと伝えられています。屋内には、高松藩の御用絵師である狩野永笑による花鳥画が描かれた襖や、頼恕直筆の掛け軸「徳霊頼」などが伝わっています。木造平屋の数寄屋建築で、老朽化が進んでいたことから平成二十八年五月から内外壁の修理や屋根のふき替えなどの大規模改修を昨年五月から実施していました。御成所の修復にあたっては、当時の工法や材料が可能な限り用いられています。平成二十九年に修復が終わり、同年六月十八日に一般公開されました。

3 願興寺

願興寺は、さぬき市を流れる鴨部川中流域に位置し、その創建は奈良時代にまでさかのといわれており、官寺の性格をもつ古代寺院であつたと考えられます。

寺号の「施薬山悲田院」の由来は、光明皇后が日本の医薬の乏しきを哀れんで、国民の諸病救済のため、日本各自に悲田院または施薬院を設けられたことに習ったものです。

長宗我部氏による兵火に遭い、現在の地に移転しましたが、南二百メートル付近から多量の瓦が出土しており、旧寺域と考えられています。昭和三十七年に庫裏・本堂を全焼しましたが、本堂再建の機運が盛り上がり、平成二十二年五月に再建されました。本尊は薬師如来、収蔵庫には重要文化財である乾漆聖観音坐像が納められて



います。

★重要文化財 乾漆聖観音坐像

ふだらく

観音菩薩は、この世にあるという補陀落山（補陀落浄土）に住み、現世利益を叶える仏です。救う相手により、千手観音、十二面観音、如意輪観音等に姿形を変えますが、基本となるのは聖観音になります。なお、千手観音や十二面観音のように観音が姿形を変えたものを変化観音と呼び、これらと区別するために聖の字を冠しています。

かんしつ

願興寺の聖観音坐像は、乾漆造という技法により造られており、奈良・京都など機内の寺院に所蔵される仏像以外では、岐阜県的美江寺にある十一面観音菩薩立像や愛媛県にある庄地区の菩薩立像が知られるくらいであり、極めて貴重な像であるといえます。

乾漆造は、主として天平時代や平安時代初期に用いられた技法で、土の原型に麻布を数枚ほど漆で貼り重ね、乾燥した後内部の土を掻き出し、改めて構造の支えとなる心木を挿入して構造体をつくります。表面の成形は、木屑など植物性のさまざまな素材を漆と混

ぜたペースト状のものを用いて行い、黒漆で整えた後、さらに彩色や金箔をほどこして仕上げます。

髻は奈良風に高く結い、地髪部にも細かい髪筋を刻み出しています。鼻や口はやや小さめに上品に作られ、頬はふっくら見事な膨らみを持ち、全体的に穏やかな雰囲気となっています。胸元には、幾重にも重なる華やかな飾りが着けられ、上腕にかかる天衣の下にも飾りがつけられています。これら宝飾品にみられる複雑で繊細な造形や、着衣にみられるやわらかな布の質感などの造形表現は、乾漆像ならではのものです。像全体に仏の持つ理想的な造形感覚が見られ、天平彫刻の優雅な作風となっています。

乾漆仏という珍しい像が讃岐に伝存する事実は興味深く、古代讃岐における都との密接な関わりを思わせる重要な仏像です。

★参考文献等

- ・さぬき市、高松市「国指定史跡 高松藩主松平家墓所」令和元年
- ・香川県立ミュージアム『高松藩主松平家墓所調査報告書』平成二十七年
- ・仏生山 来迎院 法然寺『仏生山来迎院 法然寺』平成二十八年
- ・スタジオワーク『仏像とお寺の解剖図鑑』平成二十八年
- ・山川出版社『新版 香川県の歴史散歩』平成六年
- ・願興寺ホームページ
<http://www.sanukigankouji.com/index.html>
- ・さぬき歴史文化観光ナビ 乾漆聖観音坐像
<https://rekinabi-sanuki.net/ja/arts/008.html>
- ・四国新聞 平成二十九年六月三日
「松平家二代、九代藩主の菩提寺 霊芝寺御成所を修復」

1 2月8日（日）復路

・ JR 高德線

造田（12:46 発）→高松（13:25 着）

※ 1 本前：造田（11:53 発）→高松（12:43 着）

❁次回のふるさと探訪は…（予定）

◎テーマ：「国分寺萬燈地区を歩く（仮）」

◎と き：令和元年1月19日（日）午前9時半～正午

◎集合場所：JR 端岡駅

◎参加費：無料

★公共交通機関の御案内

・ JR サポート南風リレー号多度津行

高松（9:04 発）→端岡（9:11 着）

★注意

☆広報「たかまつ」1月1日号に開催案内を掲載予定です。

※行事用駐車場はありません。公共交通機関を御利用ください。

☆小雨決行。当日、警報が発令された場合は、中止とします。

なお、中止かどうか御不明な場合、午前7時30分～9時30分に文化財課（Tel 087-839-2660）でお知らせします。電話が通じない場合は実施予定ですので、集合場所にお集まりください。

ふるさと探訪 コースアンケートのお願い(令和2年1月24日まで)

この度は、ふるさと探訪に御参加いただきありがとうございます。

来年度のコース決めの参考にさせていただきたいと思いますので、皆様の案をお聞かせいただけますと幸いです。1人何案でもOKです。どしどしお寄せください。

▶コース案

① テーマ (タイトル) ※省略可

② 探訪場所&内容 (書ききれない場合は裏面へどうぞ！)

・例：〇〇集合→〇〇古墳→〇〇神社→〇〇寺→〇〇解散 (所要時間：〇時間程度)

それぞれの場所の詳細やスケジュールを書いていただいても結構です。※時間は最大2時間半
高松市内でも市外でも結構です。

★締切 令和2年1月24日(金)

★御提出方法

- ① 12月8日(さぬき市)、1月19日(国分寺) ふるさと探訪の際に手渡し
- ② FAX (高松市文化財課 087-839-2659)
- ③ 文化財課窓口で手渡し (市役所本庁舎7階)
- ④ 郵送(〒760-8571 高松市番町一丁目8番15号 文化財課 田村 宛)
- ⑤ 電子メール (bunkazai@city.takamatsu.lg.jp) ※メールに案を直接書いてください。

お問合せ：高松市創造都市推進局文化財課 田村 ☎087-839-2660

平成31年度「ふるさと探訪」探訪先一覧(予定)

平成31年4月14日時点

月日	探訪先	講師	広報たかまつ
4月14日	玉藻公園(史跡高松城跡)と弘恵寺を訪ねる 玉藻公園(史跡高松城跡)、JR高松駅、弘恵寺	藤井 雄三さん (高松短期大学講師)	4月1日号
5月19日	レインボーロードの成り立ち 周辺の遺跡の変遷や条里の地割等から、古代から現代の都市計画についてレインボーロード周辺を歩きながら考えます。	高上 拓 (高松市文化財専門員)	5月1日号
6月9日	西植田勝名寺、藤尾神社と神内氏の史跡を訪ねる 勝名寺、藤尾神社、神内池など	村井 等さん (植田校区連合自治会長)	6月1日号
9月1日	香川県立ミュージアム特別展を観る 香川県立ミュージアムなど	香川県立ミュージアム 職員	8月15日号
10月27日	公測菊花展を訪ねる 菊花展(公測公園)、公測池、高柿神社など	久保 征四郎さん (東植田コミュニティ協議会文化部長)	10月15日号
11月17日	久米池周辺を歩く 石清水八幡宮、久米池南遺跡など	末光 甲正さん (川添文化協会副会長)	11月1日号
12月8日	新指定国史跡 高松松平家墓所(靈芝寺)を訪ねる 靈芝寺、願興寺など		12月1日号
1月19日	国分寺萬燈地区を歩く 萬燈寺、眞教寺、道妻神社など	香川 将慶 (高松市文化財専門員)	1月1日号
2月16日	本島を歩く 塩飽勤番所、笠島まちなみ保存地区など	信原 清さん (本島ガイド)	2月1日号
3月29日	栗林界限を訪ねる(仮) 藤塚神社など	木村 アンリさん (ラジオパーソナリティ)	3月15日号

※7・8月分ふるさと探訪は酷暑のため休止。

※上記内容は予定であり、変更することがあります。各実施日・集合場所については、必ず広報たかまつ、ホームページ、フェイスブック等で御確認ください。

※警報発令時は中止です。また、天候状況により当日中止となる場合もございます。予め御了承ください。

※年間8回以上参加された方には景品をお渡しします。(お渡し時期は未定です。)

「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ

※参加中は、次のことに充分留意し、意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、
道路の端を一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気を付けましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気を
つけましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。